

第76回 ちあきなおみ『喝采』に 夢を懸けた人々

平成の世が終幕を迎えようとしている今、昭和34年から始まった日本レコード大賞の大賞受賞曲・全60作品を振り返ってみると、昭和と平成では、各30作品に付けられた曲名に歴然とした違いがあることに気づきます。

英語とカタカナが横溢する平成作品は、まるで『おどるポンポコリン』が先鞭をつけたかのように、ダンス音楽が業界を席巻し、「レコード」という言葉を死語化していく過程を見せつけているように思えるほどです。

昭和の受賞曲は30作品のうち半数以上で「別離」が歌われているせいでしょう、男と女の惜別シーンが曲名からすぐに浮かんできます。そもそも第1回受賞曲『黒い花びら』歌・水原弘が亡き恋人を偲ぶ追悼歌であり、その5年後の『愛と死をみつめて』は「死」が直截に題名に示されている作品でした。

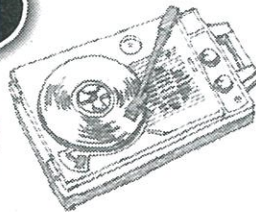
昭和47年受賞の『喝采』は実録ものではありませんが、デビュー前のち

あきなおみ自身に似たような体験があり、それが会社側の思惑でPRに使われ、ヒットの追い風となりました。

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本浦



昭和45年春、大学に入學した頃の私は歌謡ポップスとお色気もの全般に目がなく、ちあきなおみといえば、『四つのお願ひ』X+Y=LOVE』『無駄な抵抗やめましょう』をミニスカートで色っぽく歌う好印象の歌謡ポップスお姉さんシンガーと捉えていました。

そうしたイメージや歌手としてのちあきの評価を一変させたのが『喝采』でした。作詞したのは、ちあきのデビュー曲『雨に濡れた慕情』で自身も作詞家デビューを飾った吉田旺。作曲は『今は幸せかい』のあと、『喧嘩のあとでくちづけを』(歌・いしだあゆみ)、『愛は傷つきやすく』(歌・ヒデとロザンナ)などのヒット

で知られるようになっていた中村泰士。どちらもあきの歌声に惚れていた二人でした。そして、この曲から担当プロデューサーが弘田三枝子、ヒデとロザンナなどを担当していた東元晃に代わったことで、ちあきの新しい魅力創出の態勢が整います。



曲先行の作品で、吉田の歌詞が得意であった当初は「幕が開く」というタイトルだったものを、東元の発案で『喝采』に変更されたようで、もしそれが事実なら吉田が得意とする洋画タイトルを借用した見事な改題でしょう。吉田は虚構の物語を歌う歌手と現実の世界を分け隔てている象徴として舞台の幕を強調しようとしていたのでしょうが、『喝采』の次作が、ちあきのドサ廻り時代の史実と重なる『劇場』という曲でもあり、歌詞には登場しない「喝采」という言葉が聴く者の心に刺さりま

す。昭和63年に発売された傑作アルバム『伝わりますか』に、吉田は「故人となった彼に語りかける女性」を主人公にした『冬隣』を提供します。作曲した杉本真人は、歌の出だしを『喝采』の旋律と同じに設定、『喝采』の続編をあえて意識していたのでしょうか。それから4年後に、ちあきの夫・郷鉄治が亡くなったことを思うと胸が締め付けられます。